



このコーナーは新刊の心理学関連書籍を著者自らにご紹介いただくコーナーです。

心理学概論

学びと知のイノベーション

小野寺孝義

本書は、超心理学も含めた心理学全般を俯瞰させてくれる簡潔なテキストである。心理学の面白さを伝えられる内容をめざした。ただ、本書にはもう一つ特徴がある。講義でも使え、協同学習でも使えるということである。協同学習というものの自体に、まだ馴染みがない教員も多いかもしれない。協同学習といっても種類はいろいろある。ただ、どのやり方にせよ、学生は教員の話をもっと座って聞くのではなく、積極的に授業に関わり、授業を作り出す主役にならなくてはならない。この点が講義と

大きく異なる。学生の生き生きとした表情ややりとりに講義では抜け落ちていたものに気がつくこともあるかもしれない。わかりやすい授業が本当によい授業なのか、心理学を授業の中で実践することはできないのかなどを心理学の教員なら考えたことがあるだろう。また、学生の私語、学力低下、やる気の喪失に悩んだり、講義に限界を感じたこともあるかもしれない。そうなら本書で協同学習を試してみしてほしい。授業にイノベーションをもたらすきっかけとなってくれるはずである。



編著 小野寺孝義・磯崎三喜年・小川樹樹
発行 ナカニシヤ出版
B5判 / 212頁
定価 本体 2,400円 + 税
発行年月 2011年4月

おの たら たかよし
広島国際大学コミュニケーション心理学科教授。専門は社会心理学。著書はほかに『Amosによる共分散構造分析と解析事例(第2版)』『文科系の学生のための数学入門』『SPSS事典』(すべて共編、ナカニシヤ出版)、『文科系学生のための新統計学』(共著、ナカニシヤ出版)など。

心理学の「現在」がわかるブックガイド

越智啓太

筑波大学の服部環先生のリーダーシップのもと、心理学者であるまえに心理学書の読書マニアであるわれわれ5人が今まで読んできた莫大な本の中から、みなさんに本当に読んでもらいたいと思う本を厳選して、各自の思い入れたっぷりのコメントをつけて紹介したブックガイドです。予定時間を大幅にオーバーする熱い編集会議の中で、ページ数の制約からやむを得ず紹介をあきらめた本も数多くありますが、そのぶん凝縮された良いガイドブックができたことと自負しております。勉強の参考にな

る本、おもしろそうな本を探している人のガイドになるだけでなく、「この本をこんなふうを読むのか!」と評者の個性を楽しんだり、「なんでこの本を取り上げているのにこの本はないんだ」と怒ったり、「こんな本知らなかったゾ」と掘り出し物の本を発見したり、いろいろな楽しみ方ができるようになっています。また、「心理学でメシは食えるのか」「エセ心理学本にだまされるな」「心理学は文系か理系か」など執筆陣の本音のエッセイも見逃せません。是非手に取ってみてください!



監修 服部環
著 越智啓太・徳田英次・荷方邦夫・望月聡
発行 実務教育出版
四六判 / 267頁
定価 1,400円 + 税
発行年月 2011年4月

おち けいた
法政大学文学部教授。専門は犯罪心理学。著書はほかに『犯罪捜査の心理学』(単著、化学同人)、『法と心理学の事典』(共編、朝倉書店)、『子ども頃の思い出は本物が』(共訳、化学同人)、『犯罪心理学がよくわかる本』(単著、秀和システム)など。



訳 東山篤規・竹澤智美・
村上嵩至
発行 新曜社
A5判 / 320頁
定価 本体 3,500円＋税
発行年月 2011年3月

ひがしやま あつき
立命館大学文学部教授。専門は知覚心理学、環境心理学、精神物理学。著書はほかに『両眼視空間と輻輳の機能』（単著、東大出版会）、『痛みの話』（共著、日本文化科学社）、『触覚と痛み』（共著、おうふう）、『新編感覚・知覚心理学ハンドブック』（分担執筆、誠信書房）など。

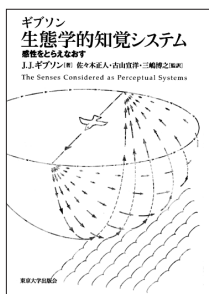
視覚ワールドの知覚

東山篤規

本書は、J. J. ギブソンの著した *The perception of the Visual World* の翻訳である。心理学には古典はないといわれるが、知覚心理学についていえば、若いときに読むべき書物がいくつかある。本書はそのひとつである。

この中で氏は「なぜ物に見えるように見えるのか」という心理学にとって根源的な問いを発している。この問いには、すでに二通りの答えが与えられていた。ひとつは、感覚データに経験的修飾が施されて知覚が生じるとしたヘルムホルツからのものであり、もうひとつは、

脳科学でも認知科学でもない思考法がここにある。本書の挿絵は、第二次世界大戦直後の古き良きアメリカの雰囲気を伝えているが、その主張は、今なお考えさせる問題を提起している。



監訳 佐々木正人・古山宣洋・
三嶋博之
発行 東京大学出版会
A5判 / 430頁
定価 本体 4,800円＋税
発行年月 2011年5月

ささき まさと
東京大学大学院教育学研究科教授。専門は生態心理学、認知科学。著書はほかに『レイアウトの法則』（単著、春秋社）、『ダーウィンの方法』（単著、岩波書店）、『アート／表現する身体』（編、東京大学出版会）、『包まれるヒト』（編著、岩波書店）、『アフォーダンス入門』（単著、講談社）など。

生態学的知覚システム

感性をとらえなおす

佐々木正人

『視覚ワールドの知覚』が出版され、本書が続き、『生態学的視覚論』と合わせ、ギブソン3冊の訳が揃った。一般には理解されていなかったニュートン力学を、ヘルムホルツが「素人用にマニュアル」して「精神物理学」を構想した（哲学者木田元氏）。ギブソンはその天才を認めながらも、このモデルを「間接知覚説」とよび反対した。感覚ではなく「知覚の精神物理学」を提案した『ワールド』ではまだ網膜像は捨てられていない。プリンストン大で学んだ、新實在論者ホルツの、「刺激が背

景化」してあらわれてくる「回転軸のような」対象、それと関連する「ひとまとまりの運動組織」のアイデアを16年間温め、「感覚刺激は知覚に関係ない」という、心理学の「コペルニクス的転回」とよべる主張を、生理学や比較形態学まで調べてあげて練り上げたのが本書。5つの知覚システムの各章では、触覚－身体覚（6、7章）のように緻密な身体論とそれを制御する環境の情報の両方が記述される。使いはじめの道具のように鈍さの残る豪胆な一冊。21世紀心理学の課題が示されている。